

この黒猫に祝福を！

双剣士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界から転生してきたチートなしのカズマと女神のアクア。

彼らを中心にしたドタバタな日常に初めて巻き込まれたのは、一人の剣士だった。

この世界に祝福を！

目次

| | |
|------------|----|
| この出会いに祝福を！ | 1 |
| 彼らの冒険に仲間を！ | 13 |
| 凡人の彼にスキルを！ | 23 |
| この対決に助力を！ | 30 |
| こんな彼らに祝杯を！ | 40 |
| 魔剣使いに祝福を？ | 51 |
| この試練に祝福を！ | 66 |

この出会いに祝福を！

駆け出し冒険者の街と言われる場所がこの世界にはある。

アクセルと呼ばれるこの街には、文字通り駆け出し、低レベルの冒険者が多く集い毎日明るく過ごしている。

中には前線を退いたような古参の者もいたりして、余勢で商売をやっていたりする。

そんな中、一人厚手の黒いコートを纏い、フードを深く被った人間が騒がしい街中でも目立つ二人組を見つけた。

「……………」

手を握り合っているとさえ言えば仲良く思えるかもしれないが、ギギギギと互いを押し合いい、にらみ合っている男女。

痴話喧嘩だろうか、そう思うが会話の内容はいまいちピンとこない。

異世界だとか、女神だとか、ニートとか訳の分からないことを言い合っていた。

(……………どうしよ)

関わり合いになりたくないが、二人の喧嘩を着にして人が集まってきていた。

正直、邪魔になっている。というか自分の行きたい彼女の店への邪魔である。

仕方ない、切り替え話しかけることにした。

「あの、こんな往来で何をしているんですか」

「へ? あ、いや……」

人に見られていることに気づいたのか、男の方がサツと手を放して少し冷や汗を流しながらうろたえた。だした。

しどろもどろと答えようと頑張ってくれているので、ちよつと待っていると水色の髪をした女性の方が笑い出した。

「プークスクス! 何話しかけられたくらいでどおどおどしてるの? ああヒキニートだったもんね、まず話すことすら難しいか」

「うっせえ黙ってろクソビッチ! あ——コホン……えつと、冒険者になりたいんですけど、登録する場所がわからなくて……」

「?……場所がわからなくて、喧嘩を?」

「いや、これは別件というか個人的なあれこれで」

「……痴情のもつれ?」

「違います!!」

あ、違うんだと納得したところで冒険者ギルドへと案内した。

「あ、こんにちはキリカさん。お久しぶりですね、今日はどういったご用件で?」

「こんにちは」

(名前の響きからして、女の人なのか…?)

受付嬢に挨拶をしていると、何だか視線を感じた。

そういうえばフードを被ったままだったことを思い出し、フードをとって改めて彼らへと向き直る。

「そういえば自己紹介してなかったね。ボク、キリカつていうんだ、よろしくね」

「あ、ご親切にドーも、カズマです。よろしくお願いします」

「ふっふっふ、聞いて驚きなさい。私は水の——」

「あ、こいつはアクアつす、適当に聞き流していいです」

「ちよつとー!?!」

仲が良いのか悪いのかわからない二人に少し困惑するキリカ。

そんなキリカを見て、思わず赤面しそうになるカズマ。

(くそ、アクアは残念過ぎるダ女神だったが、この人はマジの美少女じゃねえか!しかも超親切だし!!)

流れるような黒い長髪、身長差のおかげで少し上目遣いになっている、優し気な瞳を携えた目。コートで体のラインは分らないが、アクアよりも確実にヒロインとしてみられることができた。

「あの、それで一体どうされたんですか？」

「ああごめんなさい。この二人が冒険者になりたいって言うてて」

「あらそうなんですか？一人千エリスかかりますが？」

「う、金ない……」

「あー……ボクが貸します」

「マジすんませんほんとありがとうございます」

「いーよいよ、冒険者になる人ってお金がないから始めるって人も多いし」

それからは受付嬢から説明を受ける二人を眺めること数分、彼らのステータスを表す冒険者カードの話になり、配布されることになった。

「えっと、サトウカズマさん。筋力、生命力…魔力、どれも普通ですね」

「えっ」

「あ、でも幸運は非常に高いですよ……まあ幸運の数値ってあんまり冒険者に必要ないんですけど……」

「え……」

「これですと、基本職の《冒険者》にしかありませんが……」

「なあんだってえ〜!?」

「ブークスクス！」

「ま、まあレベルアップで転職できますし、すべての職業スキルを扱えますから」

「でも本職には及ばなくて器用貧乏なのよね、スキルポイントもいっぱいいるし」

落ち込むカズマと笑うアクア。

流石に見かねてか受付嬢がフォローするが、それもアクアによつて台無しにされていた。

「ハア」

仕方ない、と両手を地についで落ち込むカズマの隣に座つて頭をポンポンと撫でてあげながら、少しだけフォローを入れておくことにした。

「そんなに落ち込まなくても大丈夫だよ？」

「で、でも……」

「言つてたけど、冒険者は転職が可能で全てのスキルを使えるんだ。言い換えれば時間をかければどんな職業にだってなれる。それに、今から有能なスキルを会得しておけば有利なんだよ？」

「そうなんですか？」

「うん。世の中にはなりたい職業を最初から決めて、その職業の人に弟子入りしてゼロから鍛えたり、転職後に有利なスキルを冒険者になつてとつておいたり、そんな人もいるんだから」

「うう……ありがとうございます」

カズマを慰めていると、アクアのステータスを見た受付嬢が突然大きな声を上げた。

「何者ですかあなた!?! ほぼ全てのステータスが大幅に平均を超えていますよ!?!」

知力はやや低いのと幸運が最低値ですが、こんなステータスだったら魔法使い以外ならどんな上級職にもなれますよ!」

「さつすが私!?! じゃあ、アークプリーストにでもなろうかしら?」

有頂天という言葉が相応しいほど上機嫌なアクア。

それを見て悔しいのだろう、やけどばちのようにカズマがアクアを引きずってクエストへと赴いていった。

「……なんだか、嵐のようなお二人でしたね」

「あ、アハハ……一応、ボクついていくね?」

「あら、キリカさんがですか? 珍しいですね」

「んー、ここまで関わって、直後に死なれても後味悪いしね?」

「分かりました。健闘お祈りしています」

「ありがとう」

さすがに短剣すら持っていない二人で何をするのか気になったキリカは、改めてフールドを深く被ると二人を追ってクエストについていった。

そして、その思いやりは大正解だったと知る。

「こんなの倒せるかぁー!!」

「カーズウーマー! 助けて——ムグツ?!」

「なんだダメ、が……み」

大きなカエル……ジャイアントトードという魔物に追い回される二人。

道中短剣を買ってあげたのだが、分厚い肉を持つカエルには通りにくく、逃避一辺倒になっていた。

さらに、足を滑らせたアクアがカエルにつかまり……パクリと、口の中に。

「あ、アクアー?!」

「……さすがに、見てられないなあ」

苦笑いを浮かべたキリカ。

ダツシユした彼女が取り出した剣によってカエルを一刀両断するまで一秒すら掛からなかったが、アクアは唾液でベシヨベシヨになり半泣きになってしまった。

「うう……生臭いよお」

「カエル、でか過ぎ……てか、キリカさん強ええ」

「アハハ、まあボクはこれでも一端の冒険者だからね」

これくらいはね、と余裕の笑みを浮かべたキリカは、ヒロインではなくヒーローに見

えたカズマだった。

「つうか、登録料に短剣、キリカさんにこの借金を返せるのかすら怪しくないかこれ?!」
「まあ冒険者なり立てで討伐はちよつと難しいよ」

言つては何だが、カズマはこの世界の冒険者たちに比べて細い。

ステータスという異世界の異能を受けても、貧弱なのだ。

キリカだつてステータスに加えて日頃剣を振るつているため、見かけからは分からないがカズマよりは筋力がある。

「ほら、今日は街に戻ろ? トードの報酬はそつちもちでいいからさ」
「うう…:本当にありがとうございますう!」

ちなみに本来なり立ての冒険者は馬小屋で寝泊まりとなる。

まとまった金が入るまではそこで我慢するのだが、風呂から上がったアクアが駄々をこねだした。

「えー、馬小屋とか私嫌なんですけどー」

「いや、お前どうしようもないこと言うなよ」

「やだやだやあだあー!」

「あのなあ」

説得しようとカズマが叱りつけようとしたが、あつけらかんとキリカが言った言葉に

よつて二人は文字通り助かることとなる。

「ああ、なら私の家に来る?」

「やったー! キリカありがとー!」

「……いいのか?」

「本当はあんまりやらない方がいいんだけどね。まあこれも縁つてことで。一人用の小さい家だけど、我慢してね?」

「いえ、助かります!!」

キリカはこの街に一軒だけ家を持っている。

だが言った通り狭い。なにせ、本来寝泊まりするためだけの家だからだ。

「本当は王都にちゃんとしたマイホームがあるんだけどね」

「王都に?……ていうか、もしかしなくてもキリカさんつて駆け出しじゃない、ですよね?」

「まあね。この街には知り合いがいるから度々来るんだ。それと丁寧語、慣れてないなら無理しないでいいよ?名前もアクアみたいに呼び捨てでいいからさ」

「そうか?ならそうさせてもらうよ。正直、慣れなくて肩が凝りそうだったんだ」

「だろうねー。あ、アクア、ベッドはそつちの部屋ね。カズマは……悪いけど、そのソファーでお願い」

「藁の上じゃなくて本当に助かるけど……キリカはどこで寝るんだ?」

「ボクはちよつと行くとところあるから、大丈夫。明日の朝には戻るよ」

「今からか?」

すでに外は真つ暗で、女の子が一人歩くのは危険だと思つたカズマだが、キリカは駆け出しではないことを思い出した。

「もしかしてクエスト?」

「違うよー。まあ昼間様子見に行けなかつたからね」

「こんな時間に行つて大丈夫なのか?」

「まあ彼女は起きてると思うし、問題ないよ。それよりゆっくりしてて」

会うのは女性らしく、さらにクエストでもないとわかり、正直疲れていたカズマはキリカの言葉に甘えることにした。

「分かつた。本当ありがとな、おやすみ」

「ん、おやすみー」

家を出たキリカは暫く夜の街を歩いた。

ある一軒の店に辿り着くが、そこに目的の人はいない。

「となると、あつちかな?」

次に向かつたのは墓地だった。

そこには、一人の女性が巨大な魔方陣を描いてその中心で言の葉を紡いでいた。彼女が呪文を唱えていくと、墓地から魂が昇っていく……成仏しているのだ。

「相変わらずだね、ウイズ？」

「え……キリカさん!?! どうしてこんな時間に?」

「本当は昼についてたんだけど、色々あつてね」

魔法使いの格好をしている彼女はウイズ。

魔法店の店主なのだが、優しすぎる性格と特殊な品揃えから儲かつてはいない。

ただ、彼女が優しく、昔助けてもらった恩もありキリカは放っておかないだけである。

「色々ですか?」

「うん。面白い二人とあつてね、緑色の変わつた服を着た男の子と、なんか神々しい感じの女の子なんだけど……」

ウイズにあつたら世間話に花を咲かせるのが、彼女の数少ない日課の一つだった。

日課といつても一週間に一度とか、そんな頻度ではあるが。

「そうですか……じゃあ、キリカさんはそのお二人とパーティーを?」

「あー……それは、ちよつとどうしよつかな」

「……まだ気にしてるんですか?」

「アハハ、まあこんな職業だし、仕方ないんだけどね」

キリカには二つ名がある。

色々あるが、その中でも特質なのが《黒猫》だった。

不吉の象徴だと言われているそれは、彼女にぴったりと噂されている。

「あまり、気に病まない方がいいですよ」

「分かってるよ。ありがと」

「キリカさん……」

無理して笑っているのが、それなりに付き合ひのあるウイズにはわかってしまった。

それより!と無理やり話を切り替えられ、その後も彼女たちの世間話は続いた。

(……どうか、こんな頑張り屋の彼女に祝福がありますように)

話に頷きながら、ウイズは心の底でそれを願う。

もし、また彼女がパーティーを組むのなら、彼女を笑顔にしてくれるような……鬱々

し気な表情をさせない、そんな人たちであるように、と。

それはある意味叶えられることとなる。

重い気分にならない、というよりなっている場合ではない、そんな彼らと既に出会っ

ているのだから。

彼らの冒険に仲間を！

カズマとアクアが冒険者になって数日が経過していた。

その間、せめて借金返済、そして生活費くらいは自分たちで稼がねば！と彼らは日々汗水たらし頑張った。

それはもう、土木工事に掃除雑用なんのその……。

「……ってちつがあうー!!!俺が求めてた冒険者は、こんなじゃねえよ!!」

ワクワクする高揚感、心強い仲間との連帯感、見たこともない世界に思いを馳せていた彼は、この数日でそれがぶち壊しになっていることを自覚し叫んでいた。

すっかり肉体労働とこの世界のおいしいじゅうすシユワシユワ、そして優しい街の人にほだされていたが、彼が求めていたのはこんな連帯感ではない。

「なによ、うっさいわねー。仕方ないでしょ?カズマが貧弱なんだから」

「うっせえ。お前だつて碌なことしねえダ女神じゃねえか!せつかく稼いだ金を散財しやがって!!」

「なによお!私女神よ!?!むしろ足りないくらいでしょ!?!敬つてよ、もつと傳いてよ!!」

「やかましいわ!!」

ギャーギャーと騒ぎ出す彼らだが、こんな光景もすでに日常として扱われる程この街に馴染んでしまっていた。ちっとも嬉しくないかもしれないが、カズマは異世界でうまいこと生きていた。

毎日働き、その後ギルドで飲み食いをし、次の日にはほぼすつからかんになった財布を憂いて働く……。

「……………」のままじゃダメだ。仲間を募集するぞー!

この時の彼の決心は決して間違えていない。

彼が冒険者らしいことが出来ないのは明らかに力不足と人手不足が原因だからだ。

ただ、唯一惜しかったことがある。

そう、応募要項を書いたのがアクアだということだ。

とあるクエストで街を離れていたキリカは、数日ぶりにアクセルの家へと帰った。

この期間ずっとモンスターを一人で狩り続けてそれなりに疲れており、昼間から寝ようかなあなんて考えていた彼女だったが、家に入った瞬間そんな考えが消えうせた。

「……………えつと、カズマ?」

「はい、カズマです……」

カズマは緑色のジャージという独特な衣服ではなく、身軽な軽装に緑色の肩にかけるタイプのマントを羽織っていた。

これなら冒険者だと言えるだろうが、彼の意気消沈っぷりが半端ではない。おかしい、冒険者らしい装備が整ってきたのに微塵も喜んでいない。

「ど、どうしたの？」

「うう……聞いてくれよキリカああ!!」

泣き付かれてしまい、流石にこれを放置することが出来るキリカでもない。

仕方なく彼の話を聞いてみることにした。

「俺、オレ、パーティ組んだんだけどさあ……メンバーが、メンバーが酷いんだ!!」

「えっと、ひどいって全員冒険者、とか？」

「いや、アークウイザードとクルセイダー……」

「それ上級職じゃ……?」

「うう……それがさあ」

それから彼の愚痴というか泣き言というか、キリカがいない僅か数日に起こったことをそれはもう詳しく教えてくれた。

凄い才能を持っているのに爆裂魔法しか覚えず、使おうとせず、しかも一日一発使う

と倒れるアークウイザード。

確かに頑丈なんだけど、攻撃はまず当たらない。しかも攻撃を受けることに悦びを覚えてる超ドMクルセイダー。

そして止めにアクアがいつも通り不運な上に碌なことをしない散財駄女神だ、と。

「この間キャベツ狩りがあつたんだけど、ダクネスはデコイのスキル使つてまでキャベツの猛攻を受けに行くし、めぐみんは爆裂魔法でぶち抜くし……ダクネス巻き込まれても無事だし……駄女神に至つてはなぜか全部レタスで俺がツケを払うことになるし……」

「レ、レタス?というか、爆裂魔法に巻き込まれても無事つて、すごいね」

話を聞いていると、笑つていいのか感心しているのかよく分からない印象を受ける。

というか、何気に本当凄いなと思うのだが。爆裂魔法つて本当に強力で鎧を着ていようがほぼ無意味のはずなんだけど……。

「ある意味凄いや?でも、俺が欲しかったのはもつとまともな奴なんだよ!こんな色物イヤだあああああ!!!」

「はいはい、よしよし」

事の発端は応募要項に上級職のみという条件を付けたせいで、そういう色物……もとい、訳あり冒険者が集まってしまったらしい。

暫く慰めていると、少し落ち着いたのか話が違う方向へと進んだ。

「ぐすつ……：そういうえば、キリカはどこ行つてたんだ？」

「え？ ああ、ボクかい？ ちよつと討伐系のクエストを数件はしごして来たんだ」

「と、討伐クエストを……はしご？」

一件こなすことすら文字通り命がけのカズマには到底理解できない言葉が出てきた。

というか、クエストをはしごなんて聞いたことがないのだが？

「もしかして、いやもしかしなくてもキリカのところって凄腕パーティーなのか？」

「えつと、ボクはソロだよ？」

「へ？」

「あ、アハハ……」

最早白くなつてきたカズマを見てなんと云えばいいのかわからず、とりあえず笑つておくことに。

「キリカ、すごい強いんだな……」

「そんな凄くないよ。カズマだつて強くなれるつて、ほら元気出して？」

「……：というか、キリカ」

「ん？ なに？」

「ソロなら、ぜひうちのパーティーに入つてくれないか」

「え?」

真剣な表情のカズマがずずいっと顔を近づけてくる。

両手を握られており、これは逃げられない。

「いや、足を引つ張るのは重々承知なんだが、正直このままだとまずい。何がまずいって碌な収入が入りそうにない……!」

「あ、アハハ」

否定してあげたいが、日頃の散財つぶりから否定できない。収入が入ってもすぐ使い切ってしまう光景がありありと思えば浮かべられる。

「ずっととは言わない。いや、出来れば正式加入してほしいが、うちみたいなどころに入りたがるようなもの好きいだらうしな!」

「そこまで言わなくても……」

「事実だ……だから、せめて俺たちがまともにクエストをこなせるようになるまで、一緒に行動してくださいお願いします!!」

「えと、えつと……」

ついに土下座までしだしたカズマ。

どう断ろうか、と考えていたが……。

「頼むツ!」

「必死なカズマのその姿に、何だか昔見た誰かの面影を感じて……。」

「はあ。分かった、これも縁つてことで、お手伝いするね」

「あ、ありがとうおー!!」

「はいはい。もお、しようがないんだから」

それはカズマに言ったのか、それとも自分に向けたのか……わからないが、こうしてカズマたちのパーティーに仲間入りすることになったキリカだった。

「と、いうわけで今日から面倒を見てもらうことになった」

「えつと、よろしく?」

「キリカなら大歓迎よ!」

「……………」

なぜかいきなり呆然としているダクネスとめぐみん。

彼女たちはカズマの襟首を掴むと、少し離れた場所へ連れて行った。

「ちよ、なんだよいきなり!」

「か、カカカズマ、貴方どうやってあのキリカさんを引き込んだのですか!」

「は? いや、ちよつと頼み込んで。ていうか、キリカつてやつぱ有名なのか?」

「ああ。凄腕の剣士だ。ちよつと特殊なスキルを使うことから、《黒猫》という二つ名を持つている」

「ふ、二つ名……」

すげえと感心するが、その二つ名を言ったダクネス自身がちよつと表情を曇らせた。

「ただ、最近は少し嫌な使い方をされていてな」

「え? どんな?」

「不吉の証、だそうだ」

「はあ? あんない人が、不吉う?」

「色々あつたんだ。詳しくは私からあまり言えん……ただ、彼女はパーティーに入ろうとしないことで有名だ。ソロで戦果を挙げ続けているから、誰も文句も注意も出来ない凄腕だぞ」

「マジかよ……てか、もう大体予想付いたわ」

不吉の黒猫がパーティーを作らず、一人で日々を過ごす理由。

あの優しい性格から詳しいことはともかく、大方の予想はカズマの脳裏に浮かんでいた。

彼はどこぞのラノベヒーローのような鈍感ではない。知力は普通だし、現代社会に汚

染されたダメ人間だが、それなりに察しがよくないとこの世界では生きていけない。

「ともかく、碌なクエストをクリア出来ない俺たちを見てくれるんだ。普通に接してやってくれ」

「……まあ、彼女がいるなら問題ないだろう」

「はい。実力は大陸に轟いていますから」

「……マジでそんなにすごいの？」

「ああ／はい」

揃って首肯する二人。

「俺と同じ年に見えるんだけど……」

「たしか15歳と聞いてますよ？」

「年下!?!」

思わず背後のキリカを振り向いて凝視してしまう。

アクアにじやれつかれてる彼女が年下で凄腕の冒険者……。

(もう、魔王とかキリカに任せりゃいいんじゃないやね?)

思ったそれは、カズマの最後の最後に残っていたプライドっぽいものが言うことを否定したため、放たれることはなかった。

「ところでカズマ」

「ん?なんだよめぐみん」

「最近、魔王幹部が街の近くに住み着いたらしく、弱いモンスターが隠れてしまつて高難易度クエストしかないそうですが、どうしますか?」

「え」

初っ端から躓く彼らの前途は、多難である。

凡人の彼にスキルを！

流石に高難易度クエストに連れていくわけにはいかず、かといって何もしないわけにはいかない。

アクアはツケを払うためにバイトにでかけ、ダクネスは一時的に実家へと帰っていった。

そして、めぐみんは爆裂魔法を撃ちたがり、カズマとキリカを連れて離れの城の廃墟へエクスプロージョンをする事が日課になっていた。

「まん、ぞく……！」

「お疲れ様」

「よくもまあ毎日毎日飽きないな」

「まあそう言わないで上げようよ。それに、スキルを使うことは練習にもなるしね」

「練習？ただ爆裂してるだけじゃないのか？」

何もしなければ体が鈍るのと同じように、スキルだつて使い慣れていた方がいい。

威力自体はレベル上げて上げた方がいいが、爆発の規模を操れるようになればこれから有利になるだろう。

「もしあの爆発の威力を半径一メートルに絞り込むとどうなると思う?」

「恐ろしいこと聞くな……文字通り消えるだろ」

「その通り。まあ極端な例えだけどね……そうだ、カズマ今剣持ってる?」

「え、あ、ああ。モンスターもないのに何するんだ?」

携えている2本のうち1本の剣を取り出したキリカは、あっけらかんと言った。

「ん、ちよつとボクと斬りあおうか」

「は?……はあああ!?!」

職業としてもレベルとしても相手にならない。

ボス級に名前だけ付けたレベル1で初期装備の主人公が相手になるはずがない。

「勝負になるわけないだろ!?!」

「勝負しようってわけじゃないよ。格上相手に挑むだけでも経験になるってこと」

「あ、ああなるほど。パワーレベリングみたいなもんか」

「そういうこと。それに、ポイントが足りなくても今のうちに使えそうなスキルを教えておけば、好きな時に覚えられるしね」

「め、女神だ……」

「大げさだなあ」

カズマの言葉に照れた笑みを浮かべるキリカ。

そんな表情も可愛らしく、年下だと知ってはよりいっそう思ってしまった。

「それじゃ、使えそうなスキルを教えるから、斬りかかってきてみて」

「あ、ああー！」

この日から、めぐみんの爆裂魔法の後にカズマの剣の鍛錬が加えられることとなった。

「《初級魔法》に、《ステイル》《気配察知》に《潜伏》《千里眼》……それにキリカから教わった《見切り》、《魔力付与》に《魔力放出》……！」

盗賊のクリスという少女や、キリカに教わったスキルを見て嬉しがるカズマ。

ようやくと冒険者らしいスキルを手に入れることが出来て、異世界に來たと今更実感できているのだ。

「ちよつと体痛いけど、レベルも順調に上がってるし……っていうか、俺が斬りかかって一方的に弾かれるだけなのにレベルが上がるってどんだけ差があるんだよ」

もちろん最近は弾かれるだけでは上がらなくなってきたため、カズマより少し素早い動きに調節して斬りあいっぽくしてくれるようになった。

握りが甘いと、逆に力が入りすぎていたりとか色々指摘は多いが、少なくともレベルだけじゃなくカズマ個人の技術も上がっている自覚があり、喜びはさらに大きいものになっていった。

「……にしても、話してるとやっぱ転生者じゃないよなあ。天然チート、いや公式バグ?」

あまりにも強すぎるので、一時は転生者かと疑ったのだが、日本特有のネタをフツても無反応か戸惑うだけ。

ちよつとアクアに聞いてみたが、普通にこの世界に生きる人らしい。

あとはアクアの予想だが、世知辛くあまり転生したがないこの世界では珍しく輪廻転生を繰り返しているのだろう、とのことだった。

そういう風に留まってくれる人は運命の力が強くなっていったり、少しだけだがちよつとした加護があったりするのだとか。

「まあなんでもいいや。今日も頑張るかねー」

今日も今日とて爆裂と鍛錬だと気合を入れていると、何やら警報が鳴り響いた。

「緊急! 緊急! 全冒険者は装備を整え、正門前へ集まってください!!」

「……緊急?」

なんだ一体と耳を澄ませれば、なぜか魔王幹部が現れたらしい。

ギルドからの召集のため大人しく応じると、確かにそこには首なしの馬に跨る黒い鎧の男がいた。脇に自分の頭を抱え込んでいる。少しシユールだ。

「あれは、強大な力を持つアンデットモンスターのデユラハンか!」

「え、それやばい奴じゃ」

「ああ。やばいぞ、死人が出る」

ダクネスの言葉に慄いていると、デユラハンは声高らかに用件を述べた。

「貴様らに問う……毎日毎日俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでくる大馬鹿者は、一体どこ
の誰だアアアアア!!!」

あ、やっべ思いつき!心当たりあるやつだコレ。

思わず近くにいたためぐみんをみる。めぐみんは目をそらしたが、爆裂魔法を使える上に毎日撃つようなのはこの街で彼女くらいだろう。

街の人全員の視線を浴び、観念したように前へ出た。

「貴様か!ほんと何なの、なんでこんな陰湿な嫌がらせするの? 駆け出しばかりだからと無視しておけばポンポン撃ち込んで、頭おかしんじゃないのか?!」

「失礼な!……我が名はめぐみん! 紅魔族随一の魔法使い!」

「めぐ……ああ、いかれた名前の多い」

「私の名に文句があるなら聞こうじゃないか!」

文句というかツツコミというか……まあ今は置いて。

「まあいい。今日は警告に来たのだ。俺は調査のためあそこに滞在している。何もしなければこちらも手出しはせん。お前も爆裂魔法を使うな、いいな?」

「無理です。紅魔族は一日一回爆裂魔法を撃たないと死にます」

「なに、そうなのか——って嘘つけ?! そんな話聞いたことないぞ!」

なんでこんなにさらつと嘘をつけるのだろうか。

今一瞬デユラハン信じかけていたぞ。

(というか、幹部っていう割には対話しようとするし、何もしなければ手出ししないってんならどうか話を飲んだ方がいいんじゃないか?)

カズマが考えているとき、デユラハンがゆっくり手を挙げ、めぐみんへ指をさした。

「もういい、迷惑行為を止めないというならこちらも実力行使するだけだ」

騎士の手に黒い力が集まっていく。

それは、めぐみんへ放たれる——直前、手が真上に弾かれた。

力は上空へ飛んでいき、霧散した。

「——ほう?」

「……………」

「つて、キリカ?! アイツ何してんだ!?!」

2本の剣を構えたキリカが、無言でデユラハンの目の前に立ち塞がった。

小柄な黒い剣士と馬に跨った大柄の黒い騎士、生者と死者、似ているようで相反する二人の戦いが勃発しようとしていた。

この対決に助力を!

剣士と騎士が無言で構え、互いに衝突しそうになったその時だった。

「ちよつと待つてもらおうか」

「ん? 今度はなんだ?」

現れたのは茶髪で少し派手目の鎧をまとった青年。

一本の豪華な剣を所持しており、堂々と名乗りを上げた。

「僕は御剣響也。魔剣グラムを女神より与えられた、勇者だ!」

「ほお……」

「お嬢さん、ここは僕に任せてキミは下がるんだ」

「……………」

魔剣を取り出し構える青年。

ジツと下から上まで観察したキリカは、ジト目になった。

(何この人……弱い)

職業はきつと特殊なものなのだろう。魔剣を所持するような人だ、きつと随力はあ
る。

ただ、構えが中途半端だ。剣を持ち慣れてはいるが、あんな堂々と真正面に構えていてはフェイントに引つかかる。

仮にフェイントに反応出来るだけの反射神経があつたとして、それだけでは凌げるだろうが勝てない。

(ただ正義感はある。本物かは分からないけど、レベルの分強さはあるはず)

なら巻き込んで死なないだろうと判断し、改めて構える。

キリカの構えは少し独特だ。半身になつて2本の剣を前後に軽く持つ。

片手剣を2本所有している彼女ならではだろう。

「お、おい。話を聞いていたのか？」

「戦えるから問題ない。それより——」

「え」

ガキイイイン……と鉄がぶつかり合う音が響いた。

響也の視線がキリカへ向いた瞬間、デュラハンが響也の死角に入り斬りかかったのだ。

それをキリカが防いだ音であり、響也は予想通りギリギリ反応していたらしく、半瞬遅れで一步下がっていた。

「気を抜かないで、アレは強いわ」

「あ、ああ」

この時、きつとカズマだけが気づいていた。

冷静で冷徹な言葉遣い。闘気と殺気が混ざったような切り替え。

何より、響也への気の使い方。

「真正面に構えないで、敵から攻撃される的を減らすように斜めに立つの」

「は、はい!」

何だか、鍛錬をしている時のキリカになっている、と。

もしかしなくとも彼女は響也を使えるようにしようとしていた。

「ハッ、剣を持っていながら扱い方を知らないか!笑わせる!!」

「ぐっ、この」

魔剣の力を開放し、遠距離を切り裂ける透明の刃を放った。

最大出力なら魔力の巨大な斬撃を放てるが、ほぼゼロ距離の斬り合いとなるとタメる余裕がない。

それでも余裕で鎧程度は切裂くはずだったが、それはデュラハンの振るう大剣によって弾かれてしまう。

「なに!?!」

「そんなに驚くことではないだろ?俺は魔王様から加護を受けている。生半可な攻撃が

効くと思つては——」

「疾ッ」

ボツとロケット噴射のように喋っているデュラハンに突つ込んでいく。

一瞬で遠かつた間合いを詰めた彼女の鋭い突きがデュラハンを襲つた。

「うおお!!」

焦つたように身をねじり躲した。瞬時にもう片方の剣が振るわれたが、それは大剣によつて防がれる。

元から巨大な力を持つ魔剣とは違う。あれは魔力を付与……それも尋常じゃない密度であることを感じさせる威圧感があつた。

勘ではあるが、アレを真正面から受けては鎧は意味をなさないだろう。

「惜しい……」

「小娘、貴様強いな。だが、それだけならば俺には届かん!!」

2対1であるというのに、デュラハンの優勢だつた。

カズマからすると悪夢のような光景だ。魔剣というチートを持ち、恐らくスキルの効果で色々補正が掛かっているはずの転生者がまるで子供の様にあしらわれている。

「嘘だろ、響也さんでも無理なのかよ」

「あの黒猫も一緒なのよ、きつと大丈夫! 頑張つて——」

街の人々から応援が上がる。

駆け出しの彼らにはこの戦いに割って入ることなど、出来るはずもない。

(何か、何かできることはないか……!)

そんな中、カズマだけは頭の回転を続けていた。

見ているだけなんてじれった過ぎる。自分も何かしなければ。

「……—発動—」

そうこうしているうちに、キリカが手札を切った。

ぼそつと呟くと、彼女の頭から猫耳が生えた。

「……は?」

見れば、尾も出ているように見える。

「え、アレ何?」

「ん? ああ、カズマは初めて見るか。いや、私も見たのは初めてだが、あれは彼女の本気だ。魔力を消費するがあれで感覚とバランスを強化しているんだとか」

確かに動きがさつきより機敏になり、相手が動いた時にはその動きを事前に察知していたように対処していた。

アクロバットな動きも混ざり、変幻自在の二刀流になっていた。

「……………普通に可愛いんだが」

強いのは分かったが、それ以上に似合いすぎる。

なにあれ？ 反則じゃね？ とはその場にいた大半の男性と一部女性の意見である。

「シヨット」

「ぬお!!」

バチツという音がした時には、デユラハンに何かが当たった。

高速でなにかは分からないが、光ったように見える。

「今のは？」

「恐らく雷系の魔法だろう。感覚の強化に雷属性が相性がいいらしい。近距離だけが、自在に放出することが出来ると聞いている」

「へ、へえ……」

段々デユラハンが押されていくが、決め手に欠けていた。

これで彼女の武器が魔剣だったらよかったのだが、あれはちよつと高い名剣というだけだ。魔力付与されていないければ今頃折れているだろう。

「……そうだ、アクア。お前の攻撃なら効くんじゃないか？」

「当たらないと意味ないでしょ」

「それもそうか」

あの戦闘に撃ち込めるだけの命中率がなければ無理だ。

そして、それをアクアに求めるのは酷である。

「あとは、何かないか……そうだ、アクア!俺に補助魔法かけてくれ!」

「あんたに?あの二人じゃなくて?」

「いきなり補助されてもテンポが崩れて邪魔になりかねえよ。それより、俺に命中率と速力、あとできれば純粋な腕力向上も頼む!」

「要するに全体強化ね。オツケー、でも長い時間持たないわよ?」

「どうせあんなのに割り込めるのなんてできて一瞬だろうよ……それとめぐみん、魔法の準備しとけよ」

「分かってますよ」

カズマに出来ること。

それは、もしかしたらのサポートくらいだろう。

巻き込む爆裂魔法でもなく、当たらないクルセイダーにも出来ない。

偶然鍛錬で剣の扱いを覚えたカズマなら、可能性はなくてもない。

一応、カズマにどうすることも出来ない規模の何かがあった時のためにめぐみんに魔法を準備させておく。

《聖属性付与》——」

「この、小娘お前どれだけ手数がつ」

「《振動付与》、《魔力密度上昇》」

剣が白く輝き、刀身がぼやけるように高速振動し始めた。

「あ、あれってもしかして高周波ブレード!？」

「はー、なるほどね。思い付きなのかわからないけど、あの子本当に倒しちゃうんじゃない?」

細かく超振動することで切れ味を増す方法。

カズマの世界では在った技術だが、この世界にはチェインソーすらない。

魔法が普及している分、どこか科学技術は遅れているのが原因だろう。

「なっ」

切裂かれた大剣を見て驚き、その瞬間を狙って響也がデュラハン目掛けて大振りで斬りかかった。

「これでー」

「なめるなっ!」

止めを刺そうとした響也の魔剣は、デュラハンを切り裂くことはなかった。

突如現れたアンデットモンスターの大群が壁になったのだ。

「召喚魔法か!」

「行け、そいつらを足止めし、ついでに街の奴らを惨殺しろ!」

「そうはさせ……え?」

「は?」

走っていくアンデットたち。目指すは命令通り街の人々……ではなく、われらが女神アクアだった。

「なあんでよおお〜〜!!!」

「あー……しんせいなおーらつてやつのせいじゃね? つていうかチャンスだ! めぐみん!」

「アクア、その岩陰に飛び込んでください!」

「うわああ〜〜ん!」

アンデットの大群に追われるアクアは全速力で岩陰に飛び込むと、その瞬間めぐみんの爆裂魔法、エクスプロージョンが炸裂した。

アンデットは消滅し、残ったアクアは大泣きしていた。

「ヒック、私、悪いことしてないのにいなんでこんな、こんなあ〜」

「まあある意味自業自得だな……つと、逃がすか!」

強化されたカズマは、馬に乗ったまま去ろうとしているデュラハンをとらえていた。

「なっ見物していた雑魚がなにを!」

「おおらあー!」

ボツとキリカの様^{よう}に魔力を噴出し、一気に間合いを詰めた。

振った剣は当たらないが、確かにデュラハンを足止めすることに成功していた。そして、その間^間を狙い、デュラハンの背後をとった存在がいた。

黒い髪、黒いコート、白く光る剣……キリカだ。

「トドメ」

その日魔王軍幹部の一人は、少女が静かに振るった一刀により、討ち取られた。

「よせやい、褒めたってなんも出ねえぞー」

酔いも入っているのか、少しではなく顔を真っ赤にしたまま照れるカズマ。

しかし事実、大量のアンデットや逃げようとしていたデュラハンの足止めが無ければもっと泥沼になっていただろう。

もしかしたら逃げられていたかもしれない。そうしたら次は警戒され、碌なことにならないかっただろう。

犠牲者ゼロという奇跡のような現状を嬉しく思いながら、カズマと乾杯してしゅわしゅわを飲む。

「にしても今更なんだが、キリカって剣士なんだよな？にしては魔法の扱いがうまいけど、なんでだ？」

「本当に今更だね……」

「いや、だつてさ……」

「アハハ。まあ今日はめでたい日だし、いいよ。少し昔話しようか」

ぐぐつとしゅわしゅわを飲み干し、お代わりを頼んだキリカは少しだけ自分語りを始めた。

もう一杯飲み、頬が赤くなって酔いが回ってきたところでゆっくり話し出した。

「もう5年前になるかなあ。わたしはお兄ちゃんがリーダーをしてるパーティーに加入

したんだ」

「兄貴がいるのか?」

「うん。付与術師エンチャンターっていう、ちよつと変わった上級職でね、近距離もこなせる頼りになるサポーターだったんだあ」

話している間にもしゅわしゅわを飲んでおり、顔が真っ赤になってしまっている。

全ては過去形で、彼女にとつて酔わずには話せないのだろう。カズマはそこを無暗にツツコミはせず、いつもは見せないニヘラとした緩い笑顔を脳内保存しまくっていた。

「へえ。じゃあキリカの魔法はその兄貴から受け継いだものなのか?あの猫の強化魔法とかも?」

「魔法は他にもアークウイザードだったヤヨイさんとか、クルセイダーのルイさんとか、アークプリーストしてたククリくんとかから色々教わってたんだあ……アレはちよつと特別で、パーティのみんながわたしの為に作ってくれたんだよ?」

「作った?!すげえ……そんなことできるのかよ」

「まあねえ。たくさん教わったし、たあくさん貰ってたよ?」

「なるほど。というか、沢山って、じゃあもしかしてキリカって元は冒険者だったのか?」

「そおーだよ?凄腕のみんなに追いつけるようになって、がんばったなあ」

「へえ。というか、そのパーティー構成……」

ふとカズマは気づいた。

冒険者、アークプリースト、アークウイザード、クルセイダー……それって、まるで自分たちのパーティー構成そのままじゃないか？

付与術師、エンチャンターはいないがむしろその枠はキリカだとするとなおのことである。

「アハハ、流石に爆裂魔法は使えなかったし、あの魔法に巻き込まれて無事なほど頑丈じゃなかったけどねえ。宴会芸とか、まず覚える余裕なかったし」

「まあ、そだろうな」

やっぱり自分のところのポンコツたちが異常なんだと再認識しながら、キリカの話聞く。

「あれ、でもキリカって剣士なんだよな？付与術師じゃなくて」

「ん、まあね。色々あって、わたし一人で、稼がなくちやいけなくなっぴやからね」
段々酔いが酷くなってきており、そろそろ限界が近いのだろう、呂律が怪しくなっている。

しかし、彼女は語りを止めなかった。

「ずっと、ずっとずっとじぶんにエンビヤントして、剣を振るってたら、転職できるジョ

「ブがなあんでか一個だけになつててね?」

「そんなことあるのか…?」

「あはは、まあわたしがおかしいんだよ。ソロのくせに、片手剣に盾じゃなくて、両手に剣だもん」

盾という自分を守る手段ではなく、剣という敵を斬り倒す選択をした彼女。

戦闘のやり方が異常になっていった彼女に適した職業が、必然と一つに絞られてしまったというそんな話だった。

「それで、でたのが双剣士。そうけんしつて書くんだけど、読みがちよつとちがくて、……」

「? キリカ?」

「……あ、ごめんごめん」

寝落ちしかけた彼女は謝るが、流石に疲れているのかうつつらうつつらととても眠そうにしている。

「あんま無理しなくていいぞ?」

「んー、とちゆうはきもちわるいでしょー? えつと、よみはねー……ブレイズっていうんだあ」

「ブレイズ……?」

ただの剣士はソードマン。双剣士というなら、普通ツインソードとかだろう。

もしかしたら、エンチャントやらなんやら色々できる彼女だからこそその職業なのかもしれない。

「すげえんだな……」

「すう……すう……」

カズマがこの街に来てから出会った冒険者は、大体想像していた通りの、気さくな荒くれ連中ばかりだった。

プリーストやウィザードややっている女性も可愛いが、荒事に慣れていて頼もしい人ばかりだったし、何よりレベルやステータスという概念がゲーム感覚を抜けきらない。

それどころか、アクアがいれば蘇生魔法で生き返らせてくれるという話で、なお一層彼はこの世界から浮いていると自覚していた。

でも、目の前にいる少女は年下にも拘らず、ずっと過酷な状況で頑張ってきたのだ。

自分と同じ冒険者だった彼女がこんなに強くなるなんて、きつと相当無理をしてきたんだらう。

「ほんと、お疲れ様」

今だけは、この頑張り屋の少女に休息を与えたい。

そう思ったカズマは彼女を起こさないように、受付嬢のルナさんに別室に寝かせてもらうように手を貸してもらった。

……その際、ちよつと移動するのにおんぶをしてキリカの意外と柔らかく暖かな感触を味わったのは言うまでもない。

次の日、呑み過ぎの頭痛に苛まれることもなく、いつもの爆裂と鍛錬の時間を過ごしていた。

普通ならダウンしているだろうが、流石冒険者というべきか、それとも呑み慣れたアホというべきか。

ともかく、彼女たちは今日も今日とて斬り合いを行っていた。

「このっ」

「そうそう、焦らず大振りにならないで……」

果敢に斬りかかるカズマだが、やはりレベル差か職業の違いからか、軽く対処されてしまう。

だが教わったことを忘れず、忠実に、時に大胆に緩急をつけて攻撃できるようになっ

ていた。

もう一端の剣士と言つてもいいだろう。

「はい、今日はこの辺にしておこうか」

「ハア、ハア……あ、ありがとーございやす……」

ガクリツと倒れ込むカズマ。限界を見極めたような鍛錬。優しく手厳しい彼女は、意外とスパルタだった。

「そういえば、カズマ弓矢も使えるようにしたんだ？」

ふと、いつもと違って弓と矢筒を持ってきていたカズマの装備を見た。

初心者でも買える、ちよつと頑丈なだけの普通の弓矢だ。

「ん？ああ……遠距離がめぐみんの爆裂頼みだと、一発で終わっちゃうしな。もうちよつと攻撃力を上げるのと、戦法を広げる意味も込めて《狙撃》スキルを取ってみたんだ」

「そつかあ。でも只の弓矢だと意外と効かないよ？」

「そうなのか？」

「うん。肉と骨に阻まれて意外と致命になりにくいんだよね。でも極めれば……ああでも魔力付与があるから大丈夫かな？」

「あれって手から離れても大丈夫なのか？」

「うん。色々使い道があるよ?なれると、こんな感じに……」

カズマの矢筒から矢を一本だけ取り出すと、彼女はスキルを発動させた。

「《魔力付与》《雷変換》《貫通付与》《魔力放出》——!」

彼女の魔力がこめられ、その魔力が雷へと変化、さらに魔力が鋭利になり貫通性能を引き上げられた矢は、魔力放出によって手のひらから発射された。

——ドンツという音速を突破した音を残し、矢は木々を貫通しどこかへ去っていった。

「す、すげえ……」

「えへへ。でもこんなことするなら、普通に魔法を放った方がコスト的には楽だけどね」

「いや、十分だよ」

今使ったスキルは冒険者であるカズマでも行える。

流石に魔力変換や貫通属性を付与なんて難しいことはできないが、少なくとも真似事は可能だ。

というか、こんなスキルの使い方は普通しないだろう。地球出身でもないのに思いつく彼女の応用力は天才的だと、カズマは改めて思った。

「なんか、ほんとありがとな。……なあ」

なんとなく、カズマは予感がしていた。

カズマは順調に成長しているし、遠距離攻撃も覚えようとしている。仲間はポンコツだが、強力ではある。

もしかしたら、そろそろ彼女は自分たちと距離を置くかもしれない。

もともと、冒険者として最低限のクエストを行えるようになるまで、という話だったのだから。

でも、彼女は戦力的にもそうだが、やはり一人にさせるのは少しカズマ自身が嫌だと感じていた。だから――。

「もしよかったらなんだけど、俺たちと――」

再度パーティーの勧誘をしようとしたその時、ふと気配察知スキルに反応を覚えた。

少し離れた場所から走って現れる人の気配。それはまっすぐ近づいてきて……現れた。

「見つけた!!」

「「え?」」

倒れていたためぐみんと、座っていたカズマ、立ったまま一応モンスターを警戒していたキリカが呆けた声を出した。

現れたのは、豪華な鎧を着た青年。そう、名前は確か――。

「僕は御剣響也!キリカさん、僕を、僕を弟子にしてくれ!!!」

「へ？」

「は!？」

「おお……」

勧誘の前の一騒ぎが始まろうとしていた。

魔劍使いに祝福を？

「で、弟子入り？ポクに？なんで？」

頭を下げたままの御剣を見ながら、疑問をぶつける。

確かにキリカは双剣士であり、一端の冒険者だという自負はある。

だが、彼は確か……。

「職業、ソードマスターだったよね？」

「知ってくれてましたか！」

「う、うん」

ずずいっと顔を近づけてきた彼に一步引きつつ、頷く。

一度だけとはいえ共闘した相手だ。受付嬢にちよつと聞けば職業くらいなら教えてもらえた。

豪華な鎧と剣から上級職だとは思っていたが、ソードマスターだったとは知らなかった。

てつきりどこぞの防御に極振りしているクルセイダーか何かかと思っていた……。

そのどこぞの狂セイダーは止まっているのですら外すとカズマから聞いていたため、

ダクネスほど無茶苦茶してないだけかと勘違いしていたのだが、違うらしい。

「……その、ご存知だと思っんですが……僕は、剣の振り方を碌に知らない」

「え、あー」

知っているどころか戦闘中にレクチャーまでしたので、重々承知していた。

「魔剣グラムがあればどんな敵だつて一撃で倒せていた……だが、あの幹部にはそうはいかなかった。タメる間を作れなかったし、周りに人がいて、ぶっ放してしまうと巻き込んでしまうかもしれない。」

かといって、周りを気にしていたら幹部に斬られていただろう。スキルの補正で体が軽く、それも自在に動く調子に乗っていたんだ……」

「でも、それならボクよりもっと適した人がいると思うよ？ 同じソードマスターとか、知り合いにいないの？」

「いるにはいる。だが、僕は貴女に教わりたい。貴女のおかげで目が覚めたんだ！ 頼む！」

「えっと、えー……」

グイグイ来るこのイケメンをどうしようかと考えるキリカ。

正直、彼は基本が分かっていたいなかっただけで、大剣を持つこと自体は様になっていた。そして、その基本もあの戦闘の際に軽くだが教えた。

後は実戦を繰り返していつてもらうしかない。それに、そもそも大剣と双剣では運用が違うだろう。

カズマははてさてこの状況どうしようかと考えていると、地に伏しているめぐみんが話しかけてきた。

「カズマカズマ」

「はいカズマですけど？なんだめぐみん、ちょっと込み合ってるから黙ってていいぞ」
「女の子を地べたに放っておいてその言いよう、相変わらずですね。いや、そうではなくて、いいのですか？」

「……………」

皆迄言わなくともめぐみんの言いたいことは分かっていた。

このままでと取られてしまうぞ、という意味では断じてない。

だが、近い意味ではある。

(キリカの性格からして、断固拒否はしないだろうからなあ)

このままカズマの修業を終え、ミツルギの修業を始めかねない。

そして、それはそのままカズマパーティーからの完全離脱を意味する。

これからこの変態たちを自分一人で相手にするのは、考えるだけでも胃が痛い。

(まあ俺はまだ未熟だし、ちょっと強く頼めば修業は続けてもらえるだろうけど、ミツル

ギもセットで来かねない……)

チートを持った転生者が現地の美少女剣士に出会い、弟子入り……どこのラノベだと言いたいくらいに先が見据えられる展開だ。

そして、その展開を鵜呑みにするわけではないが、それでも無視はできない。さて、どうしたものかと考えていると、声が聞こえてきた。

数は二つ、少女のものだ。

「いた、キョウヤー！」

「もー、待ってって言ったでしょ!？」

声の正体は黄緑髪のポニーテールをした、剣を腰に携えた少女と、桃髪で長めのおさげをした盗賊の少女の二人だった。

どうやら彼の知り合いのようだ。恐らくパーティーメンバーなのだろう。

(チートハーレムテンプレ転生者とか……何よりまともなパーティーメンバーとか、超羨ましいっ!!)

(剣士……いや、戦士?それに盗賊かな)

彼に心底嫉妬しているカズマだが、自身のパーティーメンバーも美少女具合では負けていない。そのため嫉妬している場所は少し外れてメンバーがまともそうだというところに集約されていた。

キリカは彼女たちの装備と佇まいから職業をなんとなく当てていた。

「ああ、ごめん。探し回ってやっと見つけたから、つい」

「つい、で置いてかないでよね」

「全くもう。急に走っていかれたら、私たちじゃキョウヤに追いつけないの分かってるでしょ?」

「うっ。……ごめん」

流石に悪いと思ったのか、二人に頭を下げるミツルギ。

職業とレベルの差で地力が上がっているため、素のスペックで二人を超えている彼の速度には置いてけぼりになってしまう。

敵が見当たらなかったとはいえ、置いていかれたらそりやたまつたもんじゃないだろう。

「えっと……」

「あ、すまない。この二人は僕のパーティーメンバーなんだ。こっちは戦士のクレメア、こっちは盗賊のフィオ」

「初めまして」

「は、はじめまして」

「あ、うん。ボクはキリカっていいいます……」

つい挨拶を返してしまっただが、そんな事よりも用事を済ませる方が先だ。

ちようどいいタイミングだと感じたカズマは、そそくさとキリカ達との間に入った。

「ちよーつと失礼。悪いけど、まだ俺の修業中なんだよ。悪いけど、邪魔するなら帰ってくれないか？」

「へ？か、カズマ？」

わざと強めの口調で言ったため、若干挑発気味になってしまったが気にしない。

チートらしい能力をしつかり貰って今まで楽をしてきたミツルギに、カズマは遠慮するつもりはなかった。

「彼女、キリカさんはどこのパーティーにも所属していないと聞いていたんだが…？」

「ああちよつとした縁だな。仲良くさせてもらってるよ」

「へ、へえ……」

ピクつと少しミツルギの頬が引き攣った。

カズマの言い方にカチンと来ているらしく、そろそろ仕掛け時だとさせているカズマは頬のニヤケを必死に抑えていた。

「大体、俺と違ってそっちは他にあてがあるんだろ？そっちに行ったらどうなんだよ？」

「さっきの話を聞いていなかったのか？僕は彼女に教えてほしいんだ」

「キリカが戸惑ってんのわかんねーの？そもそも、前のデュラハンの時に手解きは受け

てただろ？勇者様なら、あとは自力で何とかして見せるよ」

挑発を重ねるカズマ。

彼の予定では、あと二言か三言で完全に自分のペースにもっていき喧嘩……は勝ち目がないため、他の何かしらの勝負事に持ちこむつもりだった。

（大体イケメンでチートとかモテない方がおかしいよな。ああそうだよ只の妬みだよ悪いかチクシヨウ!!）

誰に叫んでいるのかわからない内心を抱えながら、魔剣の力の成り上がりだとか、ぶっ放すだけならそこで倒れている爆裂娘にも出来るわとか色々言おうとしていた。

なお、挑発材料に使われる爆裂娘は、今倒れているため反撃できないのも考慮に入れているあたり、彼の狡猾さがうかがえる。

（何をするにしても、魔剣使われたら勝負にならない……出来れば、運頼みのギャンブル要素が混ざるような奴に誘導を——）

ついでに言うなら、ミツルギの後ろでカズマが言葉を重ねるたびにイライラしている二人の少女、クレメアとフィオを巻き込むつもりで言葉を選ぶ。ちなみにここまでほぼ数秒の思考だった。

大体の筋書きを脳裏に描き、心底からの言葉で脇にそらしていこうとカズマが口を開いたその時だ。

「はい、すとーっぷー！」

「ングッ?!」

後ろから抱き着くようにカズマの口をキリカが封じたのだ。

カズマが黙ったのを確認するとすぐに身を離れたが、カズマの心臓がバツクバクなのは言うまでもないだろう。

「な、何するんだよ!?!ドキドービツクリしただろうが!?!」

「だって、ボクを放置して口論しだすんだからしようがないでしょ? 喧嘩するなら鍛錬取りやめにするよ?」

「それは困る」

「素直でよろしい……えっと、ミツルギさん、だったよね」

「ああ。僕を鍛えてほしい」

紳士的な態度をとっている彼は好感が持てるが、いきなり鍛錬中に押しかけている時点でそこは打ち消されている。これで粗野で乱暴だったら冒険者流のおもてなしをすOHANASHIるのだが……。

「んー……でもね、カズマが言った通り基礎はあの時教えたんだよ? あとは貴方が自分で鍛えるだけ。それができるスペックも、スキルだって持つてるでしょ?」

「それは、そうなんだが……」

「……」

渋るミツルギと、その後ろでジツとキリカを見つめる二人の少女。

彼女たちの視線から察するに、ミツルギが鍛錬をするのはいいがキリカという少女が新たに日常に加わることを嫌がっているのだろう。

ミツルギの願いだから受けてほしいが、出来れば取りやめにならないかな、という願望がすけてみえる。

厄介なのは、ここで一方的に断れば後ろの少女たちが後で何を言ってくるかわかったものじゃない。

元々《黒猫》の名は良い意味でも悪い意味でも広まっているのだから、何と言われようがどうでもいいがカズマ達を巻き込むのはちよつと考えものだろう。

「はあ……じゃあこうしよつか。明日、ある条件下でそのカズマと戦ってもらおうよ」
「え？俺?！」

「彼と……?」

「そう。条件は明日言うけど、出来るだけ実戦に近づけた状況で——なおかつ、魔剣なしでやってもらおう」

「魔剣、なし……」

「剣はこつちで用意するけど、細工されないか心配ならそつちで用意してもいいよ」

「はい、質問ー！」

勢いよく手を挙げたカズマ。

冒険者という弱い職業だが、それでも勝ち目が無い条件下でやらせないだろうと考えているカズマは、自分がやらなきゃダメか、なんて質問はしなかった。

「なに？」

「俺の方はいつも通りでいいのか？」

「いいよ。ミツルギさんはミツルギさんが思い描くソードマスターとして、カズマはカズマらしくいつもの冒険者として戦うといいよ」

「オツケー」

ニヤリと不敵に笑い、キラーンというよりギラついた目を輝かせるカズマ。

同じように同一の女神によって転生してきたはずなのに、ミツルギと違ってこちらは随分と悪党な雰囲気が出ていた。

「つまりその彼に勝てば、弟子入りを許してもらえる、と？」

「これ以上の条件は明日言うよ。というか、許すも何も君は元々実戦さえこなせばいいだけなんだからなあ」

キリカの後半のボヤキは聞いているのかいないのか、ミツルギはやる気満々の様子で街へと戻っていった。

これから剣を仕入れに行くのかもしれないし、なにか特訓でもするのかももしれない。もしくは何ももしないかもしれない。

別に弟子にしていなくても、キリカは彼の行動に何を言うわけではない。

例え無視されたとしても、何も言わなかった。

「じゃ、今日は帰ろっか？」

「え、まだやるけど……？」

「んー、やる気があるのはいいいけど、色々準備したいんじゃない？」

「それは……いいの？」

カズマのその質問は、自分に加担するようなことを聞いていいのか、というものと鍛錬はこれで十分なのか、ソードマスターと少しはやり合えるのか、という不安だった。

「だいじょーぶ。カズマは弱いし陰湿だけど、賢いし、強いよ」

「言っていることおかしくないか？」

「おかしくないよ。ねー、めぐみん？」

「……ああー、そうですね。カズマは最弱ですが、頭がキレて厄介です」

知力が高いアークウィザードであるめぐみんは色々と察しもいい。

矛盾しているキリカの言葉にもあつさり納得し、頷いた。

上級職である二人の言葉をどうにか飲み込んだカズマ達は、進言された通り街へと引

き帰っていった。

その日の夜、武器の手入れなどの準備を終えたカズマは、アクアたちに金を握らせ酒場へ向かわせ、ちよつと無理やりキリカと家で二人きりにさせてもらった。

何かしら《条件》に関して聞けるかもしれない、という打算と……一つだけ、聴いておきたいことがあったから。

「悪いな、我がまま言つて」

「いーよ。話つて何かな？」

寝間着のキリカもやつぱり可愛い……と思考が逸れつつ、用件を切り出した。

「キリカは、パーティーに入ったり作ったりするつもりはないのか？」

「えつと……ないわけじゃ、ないよ？」

「でも戸惑つてるよな？」

「アハハ、まーね」

困った顔をする彼女。引き入れる可能性があることを確信したカズマは、意を決した。

「理由はお兄さんたちがいないことと関係してる、よな?」

「あー……まあわかるよね」

酔った勢いを使って喋ったのだ。カズマが察していることくらい、キリカにもわかっていた。

「キリカが言いたくないなら、これ以上聞く気はない。でもさ、やっぱり俺キリカにパーティに入ってほしいって気持ちがある」

「それは、ボクが強いから?」

「まあぶっちゃけそれもある」

「あはは、素直だなあ」

こういう欲望に真つすぐな彼は意外と嫌いではない。

なぜだろう? 考えても分からない。彼女がそれを語るには、今は彼との距離が遠い。

「キリカはどうだ?」

「そうだね……カズマ達は楽しそうだなあって思うよ。でも……」

「……おっし、分かった」

「?」

何かあった過去と、進んで新しい今に戸惑っている彼女には悪いが、カズマも生きるのに必死だ。

無理やりにも、仲間になってもらおうと悪知恵が働いていた。

「じゃあミツルギみたいに条件にしよーぜ？」

「ええ？」

「良いだろ、俺なんも相談されずに条件に入れられたんだし」

「あれはカズマにもいい修行になると思ってた……」

カズマが何も言わずミツルギと戦うと決めた一因として、こうして一個貸しに出来るから、ということもあつた。

狙い通りに行つて思わずニヤケてしまう。

「あー、カズマ悪い顔してる……」

「うぐ、悪い顔ってなんだ悪い顔って」

「こういう時のカズマは凄いんだもんなあ……覚えてないかもだけど、首なし騎士を狙ってた時も似たような顔してたんだよ？」

「うそ……？」

「ほんと……で、条件って？」

あつさりど条件を飲んでくれたのは、カズマ達のパーティーに惹かれているから。

それでも躊躇しているのは、過去のパーティーを忘れられないから。

何かを変えてくれるのなら、それに期待しないわけにはいかないだろう。

「いつか、俺がキリカに一本攻撃を通したら、俺のパーティーに入ってくれ」
「……それ、いつになるかわかんないよ？」

カズマは駆け出しの冒険者で、キリカは特異な職業の上級者。

差は大きい。それでも、カズマは自信を込めて言った。

「俺は運がいいからな。何かふとしたきっかけで、案外すんなりといくかもしれないぜ？」

「アハハ、それだけでうまくいくほど、ボクは甘くないぞー？」

意味は違うが、それでも笑い合う二人。

色々カズマも考えていた。だが、どんな条件を考えても、仲間想いの彼女を変えるには、やはり相応の覚悟と意思を見せなければいけないと思つた。

例えば運任せのギャンブル、例えば前世から負けなしのジャンケン……そういうものじゃなく、もっと強い自分を彼女に焼き付けなければいけない。

（簡単じゃないだろうけど、だからこそ手加減なんてしねえ。どんな手を使つてでも、絶対引き込んでやる！）

この真つ直ぐで醜くも純粋な強い想いが何なのか、生前から縁がなかったカズマは、未だ何の名称も付けられないでいた。

この試練に祝福を!

次の日、カズマ達は森林の中にいた。

木々に囲まれる中、カズマとミツルギが少し離れて対面する。

彼らは丸腰で、荷物は離れた場所に置いていた。

彼らの間には各々が用意した二本の剣が刺さっており、彼らを見守るように各々のパーティーメンバーとキリカが遠くで見物している。

「それじゃ、ルールを説明するね」

キリカの言葉に神妙な顔で二人が頷く。

元が日本人であり、礼節を重んじるミツルギはキリカに視線を向けた。

対するカズマはチラッとキリカの方を見ると、改めて前を向く。

「まずミツルギさん。魔剣なしでカズマから5分以内に「まいった」と言わせて降参させるか、もしくは気絶、戦闘不能にすること。殺し合いじゃないから、即死するようなこともダメだよ」

「分かった」

「カズマは5分凌ぐこと。気絶や戦闘不能はいいけど、同じく殺すようなことはダメ」

「ああ」

「二人とも了解したね?——うん、じゃあいいよ」

「……—え?」

キリカが笑顔でサラツと自然に告げた合図に呆けたのは、ミツルギだった。

完全にキリカを向^{他所}いていたこと、そして余りにもスタートらしくない合図。

そして何より、いの一歩に行つたカズマの行動に対して、彼は完全に虚を突かれた。

「《フリーーズ》!!」

「はあ!」

カズマ全力の凍結魔法は、初級であるが故に危機感など感じさせず、自分の側の剣を完全に凍結させた。位置の関係上、余波を受けてかミツルギの剣も少し凍っている。

さらにカズマは駆け出すと、訳の分からない行動に驚くミツルギに対しさらに魔法を発動した。

「《ブレス・アース》!!」

「ちよ、ゴホツゴホツ!」

初級風魔法初級土創成
ウインドブレスとクリエイトアースの合わせ技、砂煙^{目くらまし}をミツルギの顔面に直撃させ

た。

「このツ卑怯だぞ!!」

目をこすりながら前を見直すミツルギ。

そこにカズマはいない。同時にミツルギが用意した剣も無くなっていた。カズマは《潜伏スキル》の効果により、森林をうまく使って隠れたのだ。そして、そんなスキルを使っているからこそ、カズマは喋らない。

「くっ」

チラツとキリカを見るが、彼女は真剣に場を見つめている。

キリカの後ろではカズマのパーティーが相変わらずなカズマに呆れ、ミツルギのパーティーメンバーは「卑怯者！」「正々堂々戦いなさい！」と罵声を浴びせていた。

（キリカさんは何も言わない、ということとはこれはありなのか……）

魔剣を使わない、だから少しでもいい剣を信用ある店から買ってきたミツルギ。

対するカズマは剣の勝負ではソードマスターに勝てるはずもない。だからこそそのガン逃げであり、この戦法を選んだ。

そう、カズマの行為は卑怯かもしれない。少なくとも格好悪いだろう。

だが、間違っていない。キリカは実戦に近い状況で、と先日言っていたことを今更ながら思い出した。

（なら、僕もそうするとしよう——！）

潜伏スキルは気配を断つ。そのため、気配を察する敵感知スキルではカズマを見つけ

ることはできない。

だが、それは一步動いた瞬間に効果を失う。カズマは5分間隠れていれば勝ち。

既に考えるだけで1分は経過している。これ以上時間を無駄にすることはできない。

「フンツ!!」

ミツルギは剣のそばに駆け出すと、凍っている地面に対して拳を振り下ろした。

レベルと職業相応の腕力が発揮され、初級魔法で凍っていた氷があっけなく破壊される。

凍ったままの柄を握ると、そのまま引き抜いた。

「ハアア!!」

そして、そのまま剣を振りぬき目の前の木々を数本斬り倒してしまった。

ソードマスターの補正でこの程度の木々ならいくらでも斬り倒せる。もちろん、それ

はミツルギの力であり、魔剣の力ではない。

(彼は冒険者、目くらましがあつたとはいえ遠くには潜伏できないはずだ)

この剣では辺り一面を丸太に変えることはできない。そんな無駄なことはしないし、する前に剣そのものがダメになってしまっただろう。

だが、カズマが潜伏している範囲の木々くらいは斬り倒せるだろうと考えていた。

そしてそれは当たっている。彼が斬り倒した木々のすぐ近くに、カズマは事実潜伏し

ていた。

(くっそお。何のスキルか知らねえけど、魔剣なしでも十分チートじゃねえか!)

ミツルギが用意した剣は立派なもので、カズマでもきつと木の一本くらいなら斬り倒せるかもしれない。

だが、同じように格好良く斬り倒すのは不可能だろう。

この時点で2分が経過し、残り3分。カズマが隠れているだけで勝てる確率はグツと減った。

彼の運がいくら高くとも、この状況下で3分は持たないだろう。あと一回か二回、ミツルギが剣を振るえば居場所がばれてしまう。

「ハッ!」

そしてもう一度、剣が振るわれた。

カズマが陰に座り込んでいた木が切られ、斜めにずり落ちていく。

「くっそお!!」

座ったまま既に臨戦態勢^{準備}は整えていた。足腰のバネを使って勢いよくミツルギへ向かっていく。

「無駄だよ、剣の勝負では僕に勝てない。だから君はこういう戦法を選んだんだろう?」

「ああそうだよ! 格好悪いだろこんにやるー!」

嗤うなら嗤えとやけくそ気味に叫ぶカズマの剣を一度、二度と弾いていく。

凍っていたミツルギの剣から氷がパラパラと零れ落ち、まるでカズマの剣はただの砥石扱いの様になっていた。

「ぐぎぎっ」

「……」

つばぜり合いになりカズマは苦しい表情を浮かべるが、ミツルギは涼しい顔でカズマを押ししていく。

「そろそろ、諦めたらどうだ？勝敗は目に見えてると思うが」

「余裕な表情かましやがって、イケメンチートハーレム野郎じゃなかったら似合ってたな
くて笑い飛ばしてやるんだがなあ……！」

「何を言っているんだきみは……？」

「さらに鈍感とかやっつてらんねー!!」

ハーレムの自覚がないのか、それとも同じように女性に囲まれているカズマに言われ
たくないのか、呆けた表情を見せるミツルギ。

そんな彼に苛立つカズマだが、段々押し込まれていく。

「くっそっ」

悪態をつくが、職業としてもステータス的にもカズマがミツルギに真正面から勝てる

確率はゼロだ。

そこに奇跡を望むほどカズマは夢を見ていないし、命がけではないこの勝負にそんな強い運が働くとも考えていない。

弾くように飛びのくが、距離は開かない。《回避スキル》を用いながら、《逃走スキル》の応用でミツルギの剣から逃げるようにして避けていく。

「この、また不可思議な動きを！」

半分以上スキル任せな回避は時折カズマの体を変な方向に曲げようとし、ミツルギが戸惑う。

カズマも負荷がかかってきついが、それでもやり過ぎすことに成功していた。

だがついに、カズマは木を背に密着させ、ミツルギの剣をどうすることも出来なくなっていた。

「ハッ!!」

「ッ!!!」

再度つばぜり合いになる。二人の間で剣がせめぎ合い、ミツルギの剣からはぼたぼたと水滴が落ちていく。

「降参しろッ」

「ぐっ……ほんと、お前強いよな。ああ俺より強いよ確かに普通ならやり合うことすら

間違いだ」

「言い直しによる時間稼ぎのつもりならよせ。殺しはダメだが、それ以外なら別に構わないんだぞ」

「……」

剣呑なミツルギの言葉に押し黙るカズマ。

カズマが見つかつてからの発言のそれが時間稼ぎだということくらい、ミツルギにもわかつていた。

これ以上付き合うつもりはない、と力を込めていく。

そんなミツルギにカズマは——ニヤツと笑みを浮かべ話しかけた。

「なあ、熱膨張って知ってるか？」

「無駄話に付き合うつもりはないと——」

そこでふと、自分の持っている剣に目が向いた。

そう、さつきまで凍っていたこの剣——熱くないか？

「熱の付与、付与術ってポイント高くてな、これ取るのに苦労したんだぜ？」

「まさか、砕くつもりか？ 無駄だ、いくら何でも一度の冷却と熱では砕くことなど出来な

いぞぞ」

「一回だけならな」

ミツルギの剣とせめぎ合うカズマの剣。

だが、この剣たちはそもそも誰が用意したものだった？

そう、カズマが使っている剣はミツルギが用意したもので、ミツルギが使っている剣はカズマが用意したものだ。

「ま、さか」

「苦労したぜ？ 見かけられないように削って一部薄くして、それを凍って熱しての作業。途中で何本折ったか。労力も費用も安くなかったんだぜ？」

「キミはそこまでしてッ」

熱さを感じる剣。このままではカズマの言うように折れてしまう、そう感じたミツルギは一旦引いた。

そして――。

「へ？」

ボツとカズマが勢いよく木の上へ飛び逃げた。

《魔力放出》による上空、正確には木の枝へ飛びつく逃避方法だ。

「え？」

だが、おかしい。剣が折れかけているのだから、カズマはむしろ剣を叩き折りにくるものだとミツルギは考えていた。

「ヴァ〜カ、付与術だあ？あんな激高いの会得するとかそう簡単にできると思っ
てんじゃねえよ!!」

「なっ!?!」

カズマがやったのは付与術ではなく、初級テイ火魔法ダだった。

感じていた熱はミツルギの剣ではなくカズマの剣。カズマは自分の剣を熱し、口八丁でミツルギを騙したのだ。

これもそれも、付与術という聞きなれないスキルだからこそ出来たことであり、同時にカズマがキリカに師事されていたという事実があるからこそ成功したのだ。

「このっ」

「ああちなみに——」

「フツ」

カズマが登っている木を斬り倒そうと剣を振るうミツルギ。

もうカズマの口車に付き合うつもりはない彼は、無視して木を切りつけ——パキンツという音がした。

「……え」

「剣に細工したっつうのは本当だって遅かったな」

「な、な、な」

それでも半ばまで斬れているのは流石というべきか、それとも今までの斬り合いで折れていない絶妙加減を褒めるべきか。

怒るべきか嘆くべきかミツルギは二つの感情をさまよい――。

「そこまで!!」

キリカの声によつてその二つの感情が爆発した。

「ち、ちつくしよおー!!!」

「キヨ、キョウヤ!?!」

落ち込む彼を励まそうとクレメアとファイオが駆け寄つていく。

美少女にいたわられるミツルギに対し、カズマは逆に冷たい視線を浴びていた。

「いやあ、流石カズマね。外道だったわ」

「なんとというか、酷いですね……格好悪いです」

「情け容赦なかったな……うらやましい」

「オイお前ら、普通に称賛の言葉はでないのか？期待はしてなかったけど」

最初の最初、ミツルギの剣を奪い自分の剣を凍らせた時点でカズマの作戦の八割は成っていた。

後はもう容赦ないそのやり方にドン引かれていた。

「あ、アハハ。お疲れ様、カズマ」

「あ、ああ……俺、勝ったんだよな？」

「うん。頑張ったと思うよ」

「だよな……痛っ」

「火傷だよ、大丈夫？」

カズマは自分の剣を焼いて熱を出していたのだ。

剣を握りしめていた両手は酷い火傷を負っていた。

「診せて、回復呪文なら少し使えるし、一応治療薬もあるから」

「ああ、悪い」

ドン引くどこぞの駄女神と違って優しいキリカはカズマを労わり、カズマの手を診てくれる。

——そう、だからカズマはこんな戦法を選んだのだ。

差し出したカズマの右手を診ようと至近距離まで近づいてきたキリカ。

そんな優しい彼女をガバっと抱きしめる。

「へ!? え、か、カズ——」

「悪い、でも一本だ」

「え、あ」

キリカは首筋にカズマが隠し持っていたダガーを感じた。

鉄ではない、木で出来た手作りのダガーだ。

「こんなの、いつの間に……?」

「最初っから狙ってた。《スタイル》は見えてれば離れた物を手元に呼び寄せる役目も果たすだろ?」

離れに放っておいた荷物、そこにはこの木のダガーしか入っていないかったのだ。

鉄のダガーだと荷物を放ったときに怪しまれるかもしれないし、何より鉄より木の方が成功率は上だろう。

そう考えわざわざ木のダガーを自前しておいた。剣の細工も含め、カズマは徹夜である。

「これでパーティーに入ってくれるよな?」

「え、あ、う……」

一本取つたら入る、そう約束した。

そしてその約束に日時、詳しい方法は指定していない。だが、それはいつかという曖

味な言葉に濁されていただけ。

「……もお、仕方ないなあ」

「よっしや」

喜ぶカズマだが、彼は現状を忘れていた。

そう、これははたから見ると――。

「か、か、カズマさん？なにをしているのかしら？」

「カズマ、そこまで外道でしたか……最低ですネ」

「カズマ、パーティー加入を脅して行うのは感心しないぞ」

「二人とも、グラムはあるかな？」

「あるわよ」

「一気にやつちやつて、キョウヤ」

「え、あーちよ、ちよつと待つ!？」

少女をダガーで脅しパーティーに引き込んだ外道にしか見えない。

このあと、カズマはキリカを抱きしめていることなど忘れ、必死に弁明を重ねることとなったのだった。